

日本人高校生英語学習者の英作文に見る文法特性
Grammatical Features in
Japanese High School Students' English Compositions

村越亮治

Ryoji MURAKOSHI

神奈川県立国際言語文化アカデミア

Kanagawa Prefectural Institute of Language and Culture Studies

Abstract

This article reports on the grammatical features found in Japanese high school students' English compositions. First, the target grammatical items found in English textbooks authorized for use in junior high school were collected into a list, which was combined with another list of the items. Then, all these items were electronically extracted from the compositions and sorted out based on Item Response Theory (IRT). They were also compared against the list of grammatical structures classified into different levels in the prototypical Japanese CEFR, 'CEFRjapan.' The results show that all the grammatical items that the subjects were able to use successfully in their compositions were those taught in the very early pedagogical stages (1st and 2nd year of junior high school), and that many of those items are proposed to be acquired in elementary school according to the framework of CEFRjapan. These findings lead to the consideration of the need for promoting teaching English to young learners and improving pedagogical treatment in classrooms.

Keywords

CEFR, Japanese High School Students, English Composition,
Grammatical Features, Item Response Theory (IRT)

1. 研究の背景

2002年度から2009年度に、英語教育の先進事例となるような学校づくりを推進するため、文部科学省が英語教育を重点的に行う高等学校等を指定し、カリキュラム開発や異校種間連携等についての実践研究を実施する「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)」事業が行われ、延べ166件169校が研究に取り組んだ(文部科学省, n.d.)。その中でいくつかの学校が、生徒の英語力や技能の伸長・教材や授業活動の配列の指針とするための Can-do リストの作成を試みた。その際、大いに参考にされたのが、Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment (以下 CEFR)である(Council of Europe, 2001)。このことにより、学校現場

における CEFR の注目度はかなり上がったと言えるだろう。もちろん、「ヨーロッパ共通参照枠(吉島・大橋他, 2004)」である CEFR を日本の EFL 環境に当てはめること自体が難しく、また学校の実情(生徒の英語力等)が異なるため、各校の Can-do リストは、CEFR の考え方を踏襲しながらも、それぞれの学校独自のものになった。それはそれで効果的な試みであったと思うが、今後、より多くの学校が、学習指導要領の方向性に基づいて、教育活動に活用できる実効的な Can-do リストを作成できるようになるためには、それぞれの学校の到達目標の指針となる universal なスケールが必要になる。すなわち、日本人として(理想的には)どの時期に、どれくらいの英語力・技能が身についていることが必要か、という目安である。これについては、平成16年度から19年度の小池科研の中で、日本版 CEFR「CEFRjapan」の構築が試みられており(岡, 2008; 岡他, 2008; 小池, 2008)、続く平成20年度から23年度の投野科研では「CEFR-J」と仮称を変え、さらなる研究が進められている(投野, 2010; 投野他, 2010)。その今後の成果は学校現場に多大な貢献をするであろう。一方、本家の CEFR の方では、外国語の中でも「英語」に焦点を当てた English Profile Programme の研究の中で、学習者コーパスをもとに、それぞれのレベルを弁別する「基準特性(criterial features)」を抽出するという作業が現在進められている(Salamoura & Saville, 2009)。本研究では、実際に日本人高校生英語学習者が書いたライティング作品の中で、当該の学習者集団全体として、どのような文法項目が正しく使われているかを調査する。さらに、それらの文法項目はどの時期に学習されたものか、また上述の「CEFRjapan」の中でどのような位置を占めているかについても調べ、学校現場での指導のあり方について考察する。

2. 先行研究

日本版 CEFR の構築について、根岸(2008)は、(株)ベネッセコーポレーションの GTEC for STUDENTS のデータを分析した上で、現状においては、高等学校卒業時点で国が保障できそうな英語力のレベルは CEFR の6レベル(上から C2, C1, B2, B1, A2, A1)のうち、下から2段階目の A2くらいであろうと述べ、A1, A2レベルの細分化を提案している。実際、岡他(2008)で提示されている CEFRjapan では、フィンランドでの CEFR の応用例を参考にしながら、B2が B2.2と B2.1の2段階に、同様に B1, A2がそれぞれ B1.2, B1.1と A2.2, A2.1の2段階に、A1については A1.3, A1.2, A1.1の3段階に細分化されている。さらに今後の早期英語教育発展の可能性に鑑みて、A1の下に Pre-A1レベルが設定されている。また、ヨーロッパと異なり、英語力を駆使した実際の action の場面が少ない日本の EFL 環境での言語能力観を考慮し、それぞれのレベルで、Can-do のディスクリプターに加えて、「語彙」「文法構造」「表現例」が示されている。ディスクリプター自体も、日本における実際の教育現場での活動をより反映した記述になっている。そして、教育現場での応用を想定し、レベル設定に各校種の学年を対応させた「理想的推定モデル」が提案されている。具体的には、小学3年から始まって大学4年までに C1を目指すモデルと B2を目指すモデル、小学1年から始まって大学4年までに C1を目指すモデルと B2を目指すモデルの計4モデルが示されている。

3. 研究方法

3.1 データ収集

本研究で使用したデータは、神奈川県公立高等学校の1年生233名が入学直後に書いた自由英作文である。英作文タスクのトピックは「私の大切な人」で、40分間の *timed essay* である。高等学校での英語の授業が開始する前のデータであり、被験者の英語に関する学習経験は中学校3年までのものということになる。233名の英作文の総語数は21,315語、被験者1人あたりの平均語数は約91.5語であった。参考までに被験者の *GTEC for STUDENTS (Basic)* のトータル平均点は383.9 (リーディング145.0, リスニング151.5, ライティング87.5) で、同じ回の全国平均(トータル平均371)から見れば、この被験者はほぼ中位の学習者集団と言ってよい。

3.2 文法項目のリストアップと分析

調査対象とする文法項目の選択に際し、本研究では、根岸(2012)による、日本人英語学習者の文法特性を調査するためのリスト項目(53項目)に、6社3学年分の中学校検定教科書の、各レッスン各パートでターゲットとなっているすべての文法項目(63項目)を加えて、分析に用いるチェックリストにした(Appendix 参照)。そして、計116のそれぞれの項目が、英作文の中で1箇所でも正しく使用されているか、まったく使用されていないかをチェックし、1/0の値でスプレッドシートに入力した。それらの入力データを項目応答理論(*Item Response Theory: IRT*)を用いた項目分析ソフトである *RASCAL* (*Assessment Systems Corporation*) で分析し、当該学習者集団が使えるようになっていると言える文法項目の特定を試みた。さらに、それらの文法項目が中学校のどの学年で学習されたものかを調べるために、検定教科書の文法シラバスとの照合を行った。また、上述の *CEFRjapan* の中で、それらの文法項目がどのレベルに設定されているかを調べ、提案されている4つの「理想的推定モデル」のうち、小学3年生から英語教育を始める場合の2モデルにおいて、(理想的には)どの時期に使えるようになっているべきとされているかを確認した。

4. 結果

4.1 文法特性推定のための文法項目の特定

4.1.1 *RASCAL* による分析結果1：項目難易度と対応する被験者の分布

図1を見ると、文法項目の難易度(数値が大きいほど難易度は高い)が広範囲にちらばっている一方で、被験者の分布は難易度の低い方に偏っていることが分かる。さらに詳しく見ると、被験者の有効分布が認められる難易度 -4.0から -1.0までの項目が、当該学習者集団が特徴的に使用している文法項目であることが推察される。

4.1.2 *RASCAL* による分析結果2：各項目の項目難易度

表1では、項目難易度(*Difficulty*：左から2列目)の順に文法項目(*Item*：最左列)がソートされている(下に行くほど難)。上記分析で求められた項目難易度 -1.0までの文法項目は、*Item No.* 2から下方の *No.* 68までと判断することができる。それぞれの *Item No.* は順に対応している。これら24項目が、本研究の被験者の集団が特徴的に使用している(使えるようになっている)と推察できる具体的な文法項目ということになる。

第3文型(2), 現在形の be 動詞(54), 一般動詞の現在形(3単現は除く)(55), 所有格(67), S+ 現在形の be 動詞 + 形容詞(62), 複数形～s(63), 目的格の人称代名詞 me(65), 第1文型(1), 副詞節 when～(84), 目的格の人称代名詞 me 以外(66), 不定冠詞(53), 過去形の be 動詞(74), 定冠詞(51), I know/think [that] ... (3), I think [that] ... (71), 規則動詞の過去形(69), want to ... (80), want/would like to ... (4), 不規則動詞の過去形(70), 3人称単数現在形の一般動詞(56), will(78), 能力の can(35), 第4文型(6), 現在進行形(68)

ただし、英作文タスクのトピックが「私の大切な人」というものであるため、そのトピックに依存して、比較的易しいがもともと出現しにくい項目があることは予想される。例えば、ここに挙がっていない項目のうち、直接 wh- 疑問文、さまざまな yes-no 疑問文、命令文などは、直接話法を用いない限りは使用されにくいだろう。

4.2 中学校検定教科書文法シラバスとの照合

RASCAL による分析で特定された文法項目が中学校のどの学年で学習されたものか、言い換えれば、当該学習者集団は、トピックを与えられた自由英作文の中で、過去どの時期に学習した文法項目を使えるようになっているのかを、6社3学年の検定教科書の文法シラバスと照合することで調査した。その結果、すべての文法項目は中学1年から2年に学習したもので、中学3年で学習したものは使っていないことが分かった。内訳を見てみると、24項目中16項目が中学1年、8項目が中学2年の学習文法項目であった。

4.3 CEFRjapan との照合

特定された文法項目が、CEFRjapan のどのレベルの「文法構造」リストに挙げられているか、またそれぞれの文法項目に貼り付けられたレベルは、小学3年から英語教育をスタートする場合の2つの「理想的推定モデル」において、どの時期に到達されているべきレベルとされているかを調べた。小1ではなく、小3開始モデルを選んだ理由は、「英語教育」ではなく「外国語活動」が小学5,6年で必修となっている現在の状況から見て、将来的に、より実行可能性が高いモデル設定であると判断したからである。調査の結果、「文法構造」リストに記述が認められた18項目の内訳は、両モデルで「小学校のうちに習得すべき」とされる Pre-A1～A1.1のレベルに入るものが11項目、「中学1年の段階で習得すべき」とされている A1.2に入るものが6項目、「中学2年の段階で習得すべき」とされる A1.3レベルのものが1項目となった。すなわち、中学校3年間の英語学習を修了した本研究の被験者が、使えるようになっているとみなされる文法項目の多くは、韓国・中国・台湾と同様に小学3年から英語教育を開始する想定で作成された CEFRjapan のモデルにおいては、小学校段階における到達目標項目であるということになる。

表2 特定された文法項目の検定教科書における学習学年

	A	B	C	D	E	F
第3文型(2)	*1	*1	*1	*1	*1	*1
現在形の be 動詞(54)	1	1	1	1	1	1
一般動詞の現在形(3単現は除く)(55)	1	1	1	1	1	1
所有格(67)	1	1	1	1	1	*1
S+ 現在形の be 動詞 + 形容詞(62)	*1	*1	1	*1	*1	*1
複数形～s(63)	1	1	1	1	1	*1
目的格の人称代名詞 me(65)	*1	1	1	1	1	*1
第1文型(1)	*1	*1	*1	*1	*1	*1
副詞節 when～(84)	2	2	2	2	2	2
目的格の人称代名詞 me 以外(66)	*1	1	1	1	1	*1
不定冠詞(53)	*1	*1	*1	*1	*1	*1
過去形の be 動詞(74)	2	2	2	2	2	2
定冠詞(51)	*1	*1	*1	*1	*1	*1
I know/think [that] ... (3)	2	2	2	2	2	1
I think [that] ... (71)	2	2	2	2	2	1
規則動詞の過去形(69)	1	1	1	1	1	1
want to ... (80)	2	2	2	2	2	2
want/would like to ... (4)	**2	**2	**2	**2	**2	**2
不規則動詞の過去形(70)	1	2	1	1	2	1
3人称単数現在形の一般動詞(56)	1	1	1	1	1	1
will(78)	2	2	2	2	2	2
能力の can(35)	1	1	1	1	1	1
第4文型(6)	2	2	2	2	2	2
現在進行形(68)	1	1	1	1	1	1

・A～Fは出版社，数字は学習学年を表す。

・*のついた数字は，明示的にターゲットになっていないが当該学年で出現していることを表す。

・**については‘would like to’の出現がないため，‘want to’とみなして分析している。

表3 特定された文法項目の CEFRjapan におけるレベルと
「理想的推定モデル」における習得学年

	CEFR japan におけるレベル	小3開始 C1到達モデル	小3開始 B2到達モデル
第3文型(2)	Pre-A1, A1.1	小3～小5	小3～小6
現在形の be 動詞(54)	Pre-A1, A1.1	小3～小5	小3～小6
一般動詞の現在形(3単現は除く)(55)	Pre-A1, A1.1	小3～小5	小3～小6
所有格(67)	A1.1	小5	小6
S+ 現在形の be 動詞 + 形容詞(62)	A1.1	小5	小6
複数形～s(63)	A1.1	小5	小6
目的格の人称代名詞 me(65)	A1.1	小5	小6
第1文型(1)	Pre-A1, A1.1	小3～小5	小3～小6
副詞節 when～(84)	A1.3	中2	中2
目的格の人称代名詞 me 以外(66)	A1.1	小5	小6
不定冠詞(53)	—	—	—
過去形の be 動詞(74)	—	—	—
定冠詞(51)	—	—	—
I know/think [that] ... (3)	—	—	—
I think [that] ... (71)	—	—	—
規則動詞の過去形(69)	A1.2	中1	中1
want to ... (80)	A1.2	中1	中1
want/would like to ... (4)	A1.2	中1	中1
不規則動詞の過去形(70)	A1.2	中1	中1
3人称単数現在形の一般動詞(56)	—	—	—
will(78)	A1.2	中1	中1
能力の can(35)	Pre-A1, A1.1	小3～小5	小3～小6
第4文型(6)	A1.2	中1	中1
現在進行形(68)	A1.1	小5	小6

5. 考察

これまでの分析結果から、次の2点について考察した。

まず、学習した文法項目を正しく使えるようになるまでには時間がかかるということである。本研究の被験者である高校1年生の学習者集団が、使えるようになってくると推察される文法項目は、3分の1が中学2年、3分の2は中学1年の学習事項である。全員が中学3年の学習を経て、多くの被験者は入学試験も経験している。文法の客観テストではよい点数を取る者でも、いざ「使う」場面になると、その言語知識を活かし切れていない。個々の英作文を見てみると、その要因として、「誤り(error)」よりも「回避(avoidance)」の傾向がうかがえる。文法項目に対する学習後の練習が不足しているため十分に内在化せず、自信を持つ

て使うことがためらわれる、ということは容易に想像できる。初期に学習された文法項目については、その後の学習期間においても当然高頻度で出現し、授業等の中でもくりかえし明示的に触れられるものも多いと思われるが、後期に学習された文法項目については、学習後の時間の短さに加えて出現頻度も高くないために練習する機会が少なくなる。その顕著な例が「関係代名詞」である。本研究では、既習のもののうち、主格の使用は皆無で、わずかな目的格の使用が見られるにとどまった。これらの分析結果は、練習量の差が、言語使用に如実に表れた結果と言えるかもしれない。円滑な言語使用に必要な十分な練習量を保障するためには、教室における言語活動のより一層の充実が求められるだろう。

2点目は、早期英語教育の必要性についてである。CEFRjapanの「理想的推定モデル」と本研究による現状の分析結果にはかなりの乖離が認められる。本研究の被験者は上述のとおり、英語力に関しては中位の学習者集団である。極めて標準的な高校生と言ってよいだろう。その集団が中学校修了時に(やっと自信を持って)使えるようになっている中学1年の文法項目の多くは、「理想的推定モデル」では小学校のうちに使いこなせなければならないものということになる。例えば、到達目標を明確にB2に置くならば、アジア近隣諸国のように早期から「英語教育」を開始するとともに、学習した文法や語彙を使いこなせるようにするための学習(指導)の質を今よりも向上させる必要があるだろう。国の施策としてどこまでのレベルを目指すべきなのか、現場の指導に明確に影響すると思われる各レベルに付与されている「文法構造」リスト等は妥当なものなのか、など、CEFR-Jを中心とした今後の研究成果が待たれるところである。

6. 今後の研究課題

本研究では中学校修了直後の高校1年生の英作文データを分析し、使えるようになっている文法項目の特定を試みた。今後は、English Profile ProgrammeやCEFR-Jの研究結果と照らし合わせながら、同じ学習者集団が、その後の学習経験で使えるようになった文法項目の変化を、追分析したいと考えている。

謝辞

本研究に際し、東京外国語大学大学院の根岸雅史教授から多大なご指導とご助言をいただいた。また、秋田県立横手清陵学院の藤田義人氏、東京外国語大学大学院博士後期課程の金田拓氏にはデータ分析のご協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表す。

参考文献

- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Salamoura, A. & Saville, N. (2009). Criterial features across the CEFR levels: Evidence from the English Profile Programme. *Research Notes*, 37, 34-40, Cambridge: Cambridge ESOL.
- 岡秀夫 2008.「英語教育の基準を求めて—日本版CEFRへの取り組み」『英語展望』No. 116, 2008夏号, pp.18-23, 80. 英語教育協議会(ELEC).

- 岡秀夫・三好重仁・川成美香・笹島茂・高田智子 2008. 「CEFRjapan 構築を目指して」小池生夫(研究代表). 『第二言語習得研究を基盤とする小, 中, 高, 大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究 研究成果報告書』, pp.1-65. 明海大学.
- 小池生夫 2008. 「世界基準を見据えた英語教育－国家的な危機に対応する小池科研の研究成果と提言－」『英語展望』No. 116, 2008夏号, pp.14-17. 英語教育協議会(ELEC).
- 投野由紀夫 2010. 「CEFR 準拠の日本版英語到達指標の策定へ」『英語教育』2010年10月増刊号, pp.60-63. 大修館書店.
- 投野由紀夫(研究代表) 2010. 『小, 中, 高, 大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証 中間報告書』東京外国語大学.
- 根岸雅史 2008. 「CEFR の日本人学習者への適用可能性とそこから見た日本人英語学習者のレベル」小池生夫(研究代表). 『第二言語習得研究を基盤とする小, 中, 高, 大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究 研究成果報告書』, pp.399-414. 明海大学.
- 根岸雅史 2012. 「CEFR 基準特性に基づくチェックリスト方式による英作文の採点可能性」『ARCLE REVIEW』No.6, pp.80-89. Action Research Center for Language Education. 文部科学省. 「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)について」 Available: http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1293088.htm [2011年8月31日]
- 吉島茂・大橋理枝他(訳・編) 2004. 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社.

Appendix 本研究で使用した文法項目一覧

1	第1文型	61	疑問詞 + did + 主語 + 動詞 ~? の疑問文
2	第3文型	62	S+V(=be)+C(=形容詞)現在形
3	I know/think that ...	63	複数形 ~s
4	I want/would like to...	64	命令文, Let's ~, 否定命令文
5	直接 wh- 疑問文	65	目的格の人称代名詞 me
6	第4文型	66	目的格の人称代名詞 me 以外
7	過去分詞による後置修飾	67	所有格
8	現在分詞による後置修飾	68	現在進行形(平叙文・疑問文・what の疑問文)
9	S V O to 不定詞	69	規則動詞の過去形
10	S V O ing	70	不規則動詞の過去形
11	it ... that	71	I think that ...
12	He said to me (that)	72	A or B の疑問文
13	関係代名詞(所有格)	73	疑問詞主語の文
14	間接 wh- 疑問文	74	be 動詞の過去形
15	擬似分裂文タイプ I	75	S+V(=look など)+C(=形容詞)
16	不定詞付きの間接 wh- 疑問文	76	become + 名詞
17	would rather	77	be going to ~
18	had better	78	will
19	主節の後ろに来る分詞構文(現在分詞)	79	不定詞の副詞的用法(目的)
20	主節の前に来る分詞構文(現在分詞)	80	want to ~
21	it ... to ~	81	不定詞の形容詞的用法
22	擬似分裂文タイプ II	82	have to, don't have to ~
23	She told me that ...	83	副詞節の if
24	第5文型	84	副詞節の when
25	may 可能性	85	副詞節の because
26	may 許可	86	There is / are
27	might 可能性	87	動名詞(動詞の目的語)
28	might 許可	88	動名詞(主語)
29	can 許可を暗示する能力	89	形容詞の比較級・最上級
30	can 可能性	90	Which + 形容詞の比較級
31	must 義務	91	副詞の比較級・最上級
32	must 必要性	92	as ~ as
33	should アドバイス	93	Why ~? / To ... (不定詞の副詞的用法)
34	should 可能性	94	Why ~? / Because ...
35	can 能力	95	Shall I / Will you / Would you ~?
36	could 能力以外	96	Can I ~? / Can you ~?(許可・依頼)
37	would (would like to 以外)	97	付加疑問文
38	関係代名詞 制限用法(S-S)	98	過去進行形
39	関係代名詞 制限用法(S-O)	99	受動態(慣用表現でないもの)
40	関係代名詞 制限用法(O-S)	100	第5文型(make)
41	関係代名詞 制限用法(O-O)	101	第5文型(call)
42	関係代名詞所有格 非制限用法	102	第5文型(その他)
43	関係代名詞 非制限用法(S-S)	103	現在完了(継続), How long
44	関係代名詞 非制限用法(S-O)	104	現在完了(経験)
45	関係代名詞 非制限用法(O-S)	105	have been to
46	関係代名詞 非制限用法(O-O)	106	現在完了(完了・結果)
47	関係副詞 制限用法	107	不定詞の形容詞的用法
48	関係副詞 非制限用法	108	不定詞の副詞的用法(原因)
49	受動態	109	teach+O+how to ~
50	完了形	110	It is ... to ~
51	定冠詞	111	It is ... for ~ to ~
52	助動詞+have+ 過去分詞	112	分詞の後置修飾
53	不定冠詞	113	名詞+S+V(省略された関係代名詞)
54	be 動詞(平叙文・yes-no 疑問文)	114	関係代名詞 who
55	一般動詞の現在形(3単現は除く)	115	関係代名詞 that, which+V (O-S)
56	3単現の一般動詞	116	関係代名詞 that, which+S+V (O-O)
57	Does の疑問文・否定文		
58	疑問詞 + be 動詞 + 主語 ~? の疑問文		
59	疑問詞 + do/does + 主語 + 動詞 ~? の疑問文		
60	Did の疑問文・否定文		